

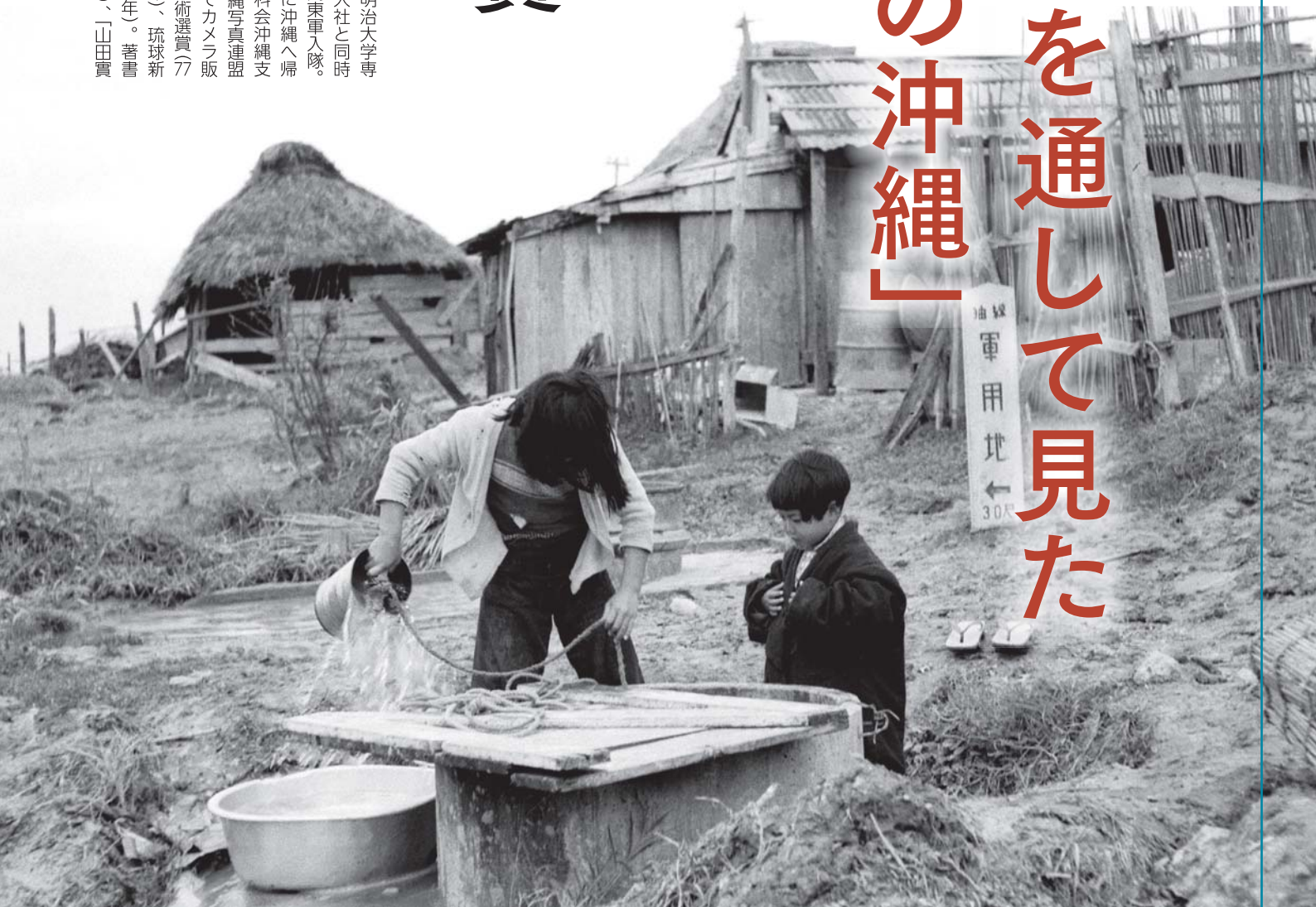
レンズを通して見た 「戦後の沖縄」

写真家

山田 實

やまだ・みのる

1918年生、那覇市出身。41年、明治大学専門部商科を卒業、日産土木株式会社入社と同時に満州へ赴任。44年に召集を受け、関東軍入隊。敗戦後、シベリア抑留を経て、53年に沖縄へ帰還。同年、山田写真機店を開業。二科会沖縄支部写真部、沖縄ニッコールクラブ・沖縄写真連盟設立に参加。写真機材商組合長としてカメラ販売・写真普及に尽力。沖縄タイムス芸術選賞(77年)、地域文化功労者表彰(2002年)、琉球新報賞(09年)、日本写真協会功労賞(13年)。著書に「子どもたちのオキナワ」(池宮商会)、「山田實が見た戦後沖縄」(琉球新報社)など。



水汲みの姉妹 那覇市安里(あさと) 1959年



現在的那覇市安里近辺

戦後の沖縄と 写真機店の思い出

編集部 山田さんが写真を撮られるようになったきっかけからお聞かせいただけますか？

山田 私が中学生になった時に、子どもでも簡単に撮れるカメラを親父が買ってくれました。小学生の頃から私が絵を描くのが好きだったこともあって、買ってくれたのでしよう。初めて手にしたそのカメラで、医師だった父が営む病院の看護師や弟などを撮ったのが、写真との最初の出会いでした。でも、当時の私は写真より絵に対する関心のほうが高かったです。中学校では絵の同好会に入り、水彩画に夢中でした。



た真新しい道路だけがありました。現在、国道58号線といわれている大通りは、沖縄が本土復帰するまでは1号線と呼ばれていたもので、那覇港に着いた兵器を嘉手納の飛行場まで運ぶため、トラックが夜通し走っていました。

500台も売れたといいます。私の店にも夜中の2〜3時頃にドアを叩いて「朝の飛行機でベトナムへ行くから、カメラを売ってくれ」と米兵がやって来たことがありましたね。

編集部 写真機店の経営が軌道にのる

一方で、山田さんは戦後の沖縄写真界、芸術文化に深くかかわっていかれます。1950年代は、まさに沖縄写真界の黎明期だったそうですね。

山田 基地建設にかかわる土建業者の中

にいた写真愛好家の助言で、52年に沖縄初の写真団体「沖縄写真クラブ」がつくられました。56年には美術展「沖展」に写真部門が新設され、私も58年の二科会沖縄支部の写真部結成メンバーになりました。

翌年には、沖縄写真クラブのメンバーで、モデルや風景の撮影では満足できないという活発な若者たちから「山田さん、新しい写真クラブをつくらう」と声をかけられ、「沖縄ニッコールクラブ」が発足。このクラブは、沖縄が本土復帰してからはニッコールクラブ

沖縄支部になり、現在も活動が続いています。今年6月に開催した写真展は、回を重ねて49回目になりました。

編集部 山田さんは、まさに沖縄の写真史になくはならない存在ですね。

変わりゆく沖縄を記録

編集部 山田さんが、戦後沖縄の日常

風景を撮影するようになられたきっかけは何だったのでしょうか。

山田 戦後まもなく、本土では子ども

がいたずらをする、親は「悪い子は沖縄に送られるよ」といっていました。まるで沖縄が鬼ヶ島のように思われていたのです。当時、東京近辺の刑務所は戦犯で満員でしたから、GHQは共産党員などを思想犯といって捕まえては、沖縄の刑務所に送っていたのです。

そういう現実が日々、新聞記事として報道されていました。本土の人たちにとっては、悪いことをすると沖縄へ連れて行かれるというのが一種の常識のようになっていたのでしょうか。

私が沖縄に戻って何年か後に、写真用品の取り引きで東京や大阪に行く機会がありました。相変わらず沖縄の気持ちは本土の人たちに知られていないと感じました。新聞が伝える沖縄は、デモの報道ばかり。本土復帰への熱が高まる中で反米デモがたくさんおこな

編集部 絵を描くことに関心があった山田さんが、本格的に写真を撮りはじめられたのは、いつ頃ですか？

山田 戦後、沖縄に帰ってきてからです。

編集部 山田さんは二・二六事件の直後に大学進学のために上京されました。卒業後に就職した会社の勤務地であった満州で召集され、関東軍に入隊。ソ連軍との交戦中に終戦を迎え、それから2年間、極寒のシベリアで飢えと過酷な労働に耐えて生還するという体験をされています。

山田 シベリア抑留から日本に帰ってきて、東京の親戚の元で5年間、体の回復を待って沖縄に帰ってきました。すでに終戦から7年経っていました。沖縄はまだ焼け野原で、米軍がつくっ

編集部 帰郷してまもなく、山田さんは那覇市の桜坂に写真機店を開業されます。ここから現在につながる写真の歩みが始まるわけですね。

山田 当時、沖縄には写真機店が2軒あり、私の店が3軒目でした。しかし、アメリカの統治下にあった沖縄で、カメラを買う余裕がある人はいません。そこで、カメラやレンズ、露出計などを風呂敷に包んで、本土から基地建設のために来ていた土建業者のキャンプを商売してまわりました。その後、ニコンの沖縄総代理店として、ニコンのカメラを扱うようになりました。その頃、米兵の間ではニコンの人氣が高く、仕入れるとすぐに売り切れる状態でした。ベトナム戦争が始まると、アメリカから沖縄にやって来た新兵たちがカメラを買って、ベトナムに持って行ったようです。また、沖縄で組み立てられていた「ベトリ」という国産カメラが、米軍の基地内で月



波之上ビーチを撮影中の東松照明 那覇市 1969年

われましたが、沖縄はデモをやっているだけではありません。もっと様々な沖縄の姿を見せたいと思ったのです。

編集部 それで、沖縄でつましく生きていた人たちの姿を写真におさめるようになったのですね。

山田 そうです。本当の沖縄を伝えるとともに、記録として残したい。そう思

うようになったのは、本土から来る写真家とのかかわりも大いに影響しています。

編集部 山田さんは、本土から沖縄にやって来る写真家たちの橋渡し役を担ってこられましたね。

山田 復帰前の沖縄はアメリカの統治下にあつて、本土から自由に入ることができませんでした。そこで、私が身元引受人になり、林忠彦、木村伊兵衛、東松照明、土門拳といった一流写真家を案内しながら撮影に同行していました。

写真家の濱谷浩先生の案内役をした時のことでした。先生は、沖縄に住んでいる私たちが撮らないようなものばかり取材しました。例えば、琉球人形を作っている職人、糸満の漁師、南風原で機織りをしているおばあちゃんなど。先生は取材現場に行っても、なぜかカメラを手にしないのです。職人の仕事ぶりをじっくり見て、いろいろな話を聞いて、話がすんだ後にやっとカメラを構える。カメラ雑誌などを頼りに独学で写真を勉強してきた私にとって、プロの写真家はこういうものなのかと、とても勉強になりました。

取材中に先生から「これから沖縄は

どんどん変わっていく。だから記録に残しておきなさい」といわれました。それからです。あちこちの田舎をまわり、船で離島にも行って、沖縄に生きる人々を写真で記録するようになりました。子どもの写真も、その時にたくさん撮りましたね。

編集部 反米デモで揺れ動く、新聞などで報道されている沖縄ではなく、現実の中で淡々と日常を紡ぐ沖縄の人たちの姿、生活そのものを、変わりゆく沖縄として山田さんは記録されてきたのですね。そうした写真の数々を見ると、どこか懐かしく、とても心を打たれます。

今も続く

沖縄に対する認識不足

編集部 戦前・戦後を通して沖縄を見つめてこられた山田さん。オスプレイや米軍基地など現在の沖縄が抱える問題について、どのようにお考えですか？

山田 沖縄の実情が知られていないということは、今も続いているように思います。多くの本土の人たちは沖縄に対する認識が昔のまま：変わっていません。沖縄が太平洋戦争の末期に戦場

として使われたことは、本当に腹立たしい。まるで沖縄を日本の領地としか思っていない。だから、アメリカに侵攻されても、最後の砦といって本土侵攻の犠牲にできたといえます。沖縄の歴史と実情を知っていれば、あのような戦場として使われなかったのではと思います。

編集部 沖縄への認識が足りないという問題は、現在の基地問題などにつながっているわけですね。近頃は、また日本の政治動向が怪しくなってきました。

山田 われわれ一般庶民が気づかないうちに、社会の情勢が危険な方向へ変わっていくのは恐ろしいことです。それをくい止めるのが、戦争を知っている世代の務めだと思えます。もちろん平和活動などにとりくんでいる生協などの役割も、とても重要です。過去の過ちを二度と起こさないようにしなければいけません。

過酷な

シベリア抑留の記憶

山田 最後に、戦争の悲惨さを次世代



に伝えるため、私が体験したシベリア抑留時の話をしたいと思っています。

私は北満州の依蘭^{いらん}でソ連軍との交戦中に終戦を迎え、捕虜となりました。連

行される途中で「兵隊さん、助けて」という声にふり返ると、开拓団の女性たちの姿がありました。しかし、私たちには、どうすることもできませんでした。その後、アムール川を船で3日間かけて移動し、上流へ連れて行かれました。棧橋も民家もない浜で降ろされ、丸1日歩いて山奥の収容所に到着。心底「これは大変な所に連れて来られた」と思いました。

私たち関東軍の兵隊200人と、300人の开拓団員・民間人、計500人は、150人程に分けられて建物に収容されました。シベリアの冬は零下40〜50℃まで下がります。極寒の原生林の中で、大木を伐採する強制労働に従事。食事は黒パン200gと具のないスープのみ。ひもじさと寒さに耐えながらの強制労働は、想像を絶するほど過

酷なものでした。シベリアに来た10月から、雪が溶ける翌年5月までの約半年で98人が亡くなりました。遺体は、貴重な衣類を脱がせて、裸で屋外に積み重ねておきます。カチカチに凍った遺体は、足や腕が簡単にポキッと折れてしまふ。当番の人が、遺体を山へ運んで埋めるのですが、永久凍土ですから穴を掘るのも大変で、1人埋めるのに3〜4日ばかりかかりました。

死線を越えて奇跡の帰還

山田 1年目に栄養失調の者があまりにも多く出たので、ソ連軍の女性軍医が視察に来ました。お粗末だった医務室は、この軍医が来てからキレイに改良され、ベッドも用意されました。また、食事についても調査がおこなわれ、収容所の所長が、私たちの食糧として配給する小麦粉などを横流ししていたことがわかりました。日本の将校たちが自分たちの分を多く取っていただけでなく、所長も搾取していたのです。こうした状態を軍医が気づいて、改善してくれました。収容所の所長は左遷され、日本の将校たちにも厳重注意があったようです。所長が代わってから

は、とたんに配給が良くなりました。まさに地獄に仏でした(涙)。

編集部 過酷な収容所での生活は、丸2年も続いたのですね。

山田 そうです。2年目の雪解けの6月に、やっと開放され下山しました。私たち約220人は、船でハバロフスクに移動しました。何年かぶりのシャワーを浴びて広場に集まると、人民裁判がはじまりました。ソ連将校が「収容所で酷い目にあわされた将校や下士官がいれば訴えなさい」といいました。収容所では軍隊組織がそのまま機能していたので、上官からの理不尽な暴力もありました。最初は誰も訴え出る者はいませんでした。最初のうち1人が「あの大尉に叩かれ、ケガをした」と訴えると、次々に訴え出る者が現れました。訴えられた上官たちは、また収容所に送り帰されました。

人民裁判の翌日、ハバロフスクからナホトカに移動。連日、軽作業をした後に社会主義の勉強会がありました。この勉強会で成績が良く、「ハラシヨ(素晴らしい)」と評価を受けたことで、私は比較的早くダモイ(帰国)組に入ることができました。

病兵とともに高砂丸という船に乗り込んで出港。しばらく航海した後、洋

上に緑の島影が見えてきた時は、みんな甲板で歓喜しました。ソ連では、「女、子どもはみんな米兵に殺されて、日本にはいない」といわれ続けていました。舞鶴港に船が着き、元気に旗を振って出迎えてくれる女性や子どもたちを見た時は、涙があふれました。あの時の感激は今も忘れられません。

編集部 まさに奇跡の帰還ですね。シベリアでのつらい体験を話していただき、ありがとうございます。貴重なお話を聞き、改めて平和の大切さを実感するとともに、これからもみんな力で

を合わせて、平和な社会を守り続けていかなければという思いを強くしました。これからもお元気で、素晴らしい写真撮り続けてください。

山田 實さんの サイン入り 写真集を プレゼント!

3名様

『山田 實 写真集
故郷は戦場だった』
未来社



本誌綴じ込みハガキにてご応募ください。